取材前線

核廃絶の思いを受け止め

西島 宏美（社会部）

地方紙記者を対象とした国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」（広島市主催）に7月末から約10日間の日程で参加している。原爆が投下された6日の平和記念式典を前に、会場となる同市の平和記念公園では準備が着々と進み、当日を待つのみとなった。

世界で最初の被爆地である広島市で、被爆者や体験を受け継ぐ人たちを取材しながら強く感じたのは「二度と被爆者を出さない」という核廃絶に向けた思いの強さだ。

しかし、核兵器を取り巻く現状は危うさを抱えたまま。米国やロシアなどが核兵器を保有し、中東や北朝鮮による核開発も懸念されている。核兵器廃絶に向け何度も国際会議が開かれているが、廃絶には至っていないのが現実だ。

核兵器廃絶―それは私にとって「遠い国が決めること」であり、「自分の力ではどうにもならないこと」だった。だが、広島で核廃絶に取り組む人たちの存在を知り、思いに触れることで考えは変わった。

核廃絶の署名活動を続ける広島女学院高2年の並川桃夏さん(17)は「核兵器の問題を自分のことに置き換えてほしい」と訴える。核兵器がこの世に存在するということは、自分や自分の大切な人が常に命の危機にさらされているということではないか。そう考えると、決して無関心ではいられない。

7年間で集まった署名は35万筆以上。「被爆者が生きているうちに」との思いから2020年までの廃絶を目指すという。一人一人ができることは微力かもしれない。しかし、その小さな力が集まれば、今の閉塞（へいそく）した状況にも風穴をあけることができるだろう。自分に何ができるのか。広島滞在中に出会った被爆者の顔を思い出しながら、答えを見つけ出したい。

2015・8・5